

吉岡佐知子・川城直美・上塚芳郎・笠貫 宏・細田瑛一
 (国立横浜病院臨床研究部) 青崎正彦
 座長 (産婦人科) 武田佳彦

特別講演

トロンボモジュリンの基礎・臨床

(帝京大学医学部第一内科 非常勤講師) 風間睦美

1. 虚血性脳血管障害患者における血小板フィブリノゲン結合能の測定

(神経内科) 山崎昌子・内山真一郎・
 橋口孝子・岩田 誠

【目的】虚血性能血管障害 (ICVD) 患者において血小板フィブリノゲン (Fbg) 結合能をフローサイトメトリー (FC) により測定した。

【方法】対象は ICVD75例 (男性46例 女性30例, 年齢46~86歳, 平均63歳) と健康成人16例で, 患者群75例中, 抗血小板剤未投与は44例, 抗血小板剤投与は31例, 内訳はチクロピジン投与17例, アスピリン投与10例, 両剤併用4例であった。方法は, 1/10容の3.8%クエン酸 Na を用いて採取した静脈血を, 採血から60分後に0~50 μ M の ADP で刺激し, FITC 標識ヤギ抗ヒト Fbg 抗体と室温にて30分間反応させ, 1%パラホルムアルデヒドを含む PBS で固定し, FC により Fbg 結合陽性率を測定した。

【結果】正常対照群と抗血小板剤投与の ICVD 患者との間には, いずれの ADP 濃度においても陽性率に有意差を認めなかった。しかし, ADP 無添加検体で, 正常対照群の90パーセンタイルをカットオフ値としてこれ以上の高い陽性率を示すものの割合は, 抗血小板剤未投与群では44例中15例 (34%) と高率に認められ, 抗血小板剤投与群では, チクロピジン投与群で18%, アスピリン投与群で30%, 併用群で25%であった。一方, ADP 刺激検体では, 抗血小板剤未投与群に比しチクロピジン投与群で, 陽性率が有意に低値であったが, アスピリン投与群では有意差を認めなかった。また, 正常対照の10パーセンタイルをカットオフ値としてこれ以下の低い陽性率を示すものの割合は, チクロピジン投与群で47%と高率であったのに対し, アスピリン投与群では10%, 抗血小板剤未投与群では7%であった。

【結論】抗血小板剤未投与の ICVD 患者では正常対照よりも未刺激血小板の Fbg 結合能亢進例が多く認められた。一方, ICVD のチクロピジン投与群では, 抗血小板剤非投与群よりも ADP 刺激血小板の Fbg 結合能が有意に低値であった。FC による血小板 Fbg 結

合能の測定は活性化血小板の検出や抗血小板療法の効果判定に有用と考えられた。

2. 胎盤形成における線溶系因子の関与

(産婦人科)

平野郁子・佐倉まり・塩崎美織子・
 中谷明子・中林正雄・武田佳彦

【目的】胎盤形成は絨毛細胞の脱落膜への侵入であり, この侵入機序には線溶系因子および metalloproteinase などの酵素による局所の蛋白融解が深く関与することが示唆されているが, これらに関する報告は極めて少ない。本研究は妊娠初期, 中期, 後期の胎盤組織の絨毛, 脱落膜における線溶系酵素とその receptor の発現, さらに線溶系酵素阻害因子の関与について検討したので報告する。

【方法】妊娠初期 (6~11週 n=6), 中期 (14~20週 n=3) の人工妊娠中絶術および正期産 (39~41週 n=5) により得られた胎盤の脱落膜, 絨毛を採取し, それぞれを細切し, 1%Triron X-100にて可溶化し, 4 $^{\circ}$ C, 15000回転で60分間遠心し上清を測定検体とした。ELISA 法にて urokinase type plasminogen activator (uPA), tissue type PA (tPA), uPA receptor (uPAR), PA inhibitor-1 (PAI-1) を測定した。

【結果】①脱落膜の uPAR は絨毛より脱落膜に多く含まれ, 初期に最も高く, 後期に著明に低下した。② uPA は脱落膜, 絨毛ともに妊娠時期による変化は少なかった。③ tPA は脱落膜では初期, 中期に高く, 後期に低下したが, 絨毛では変化がなかった。④ PAI-1は脱落膜では初期, 中期に高く, 後期に低下したが, 絨毛では変化はなかった。

【結論】妊娠初期~中期の胎盤形成過程には脱落膜の uPAR が重要な意義を持つことが示された。

3. 再発時毎にガンマグロブリン大量療法にて寛解に導入し得た血栓性血小板減少性紫斑病の1例

(血液内科)

岡野裕子・鮫島勇一・寺村正尚・
 増田道彦・泉二登志子・溝口秀昭